The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	「新古今集と私」について
Author(s)	田中, 裕
Citation	語文. 1990, 55, p. 1-3
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68815
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

追悼小島吉雄先生

「新古今集と私」について

田中裕

小島先生の多方面にわたる御業績のうち最も多くの力を注がれ、また最もよく自身の研究手法を展開されたのは新古今集に関するそれであつたらう。昭和十九年五月に刊行された『新古今和歌集の研究』（以下に『正篇』とよぶ）とその翌々年十二月刊行の同名『続篇』とには主要な関係論文の殆どが収録されてゐるので、この頃いひかへれば四十歳の前半に先生の研究の立場、手法の基本は確立されたと考へられる。この両著はその意味でも記念碑的意義をもつのであるが、『続篇』と年を同じくしてその十月、『国語と国文学』に発表された「新古今集と私」（昭和四七年十一月刊『能古』所収）も二十年の研究歴を顧みて、そこで体得された立場、手法を直接に語られた文章として注目される。それは文学研究の本道を指し示すと思はれる上、行文は含蓄に富み、ぜひ後学の人々に一読を奨めたい。先生はそこで宣長の『うひ山ぶみ』より受けた恩頼を本文を引用しつつ語られるとともに、その教へのまねびとて種々所信を吐露されてゐるのである。

「わたくしは、わたくしの研究について前以て問題を設定するといふ方法を採らなかつた。古典の研究には本文批評から出発すべきは自明の理であるから、広く諸本を渉猟して本文校合に熱心であつたが、諸本の校合をしてゐる間に、おのづから何度も何度も作品を読む結果、さまざまのことが心に思ひ浮かんだ。その心に思ひ浮かんだことどもを大切にして、それを大きく育てあげるやうに心がけた」。そしてまた「現在のわたしくは研究的方法といふことについては、比較的に自由な考へ方をしてゐるのであるが、いま、わたくし自身の立場について言へば、わたくしは、文学の研究は、詮ずるところ、作品の理解と鑑賞とにあるのだと考へてゐる。けれども、それが学問として成立するためには、実証的裏づけを必要とし、そして、その実証の方法とか過程とかはあくまで文献に即したものであり、かつ科学的でなければならないと考へる。顧みれば、わたくしの新古今集の研究はかういふ考への実践であつたとも言へるのである」。そこから次のやうな見解が導かれてくるのは当然とはいへ、重要である。即ち「わたくしは文献的考証を以てわたくしの研究の最終目的だとは考へてゐない。それは、わたくしにとつては、ある研究目的に役立たせるための基礎的調査に過ぎないのである。だから、わたくし個人の立場でいへば、分からせようとする努力（筆者いふ、別の箇所の文言によれば「正確な文献的根拠の発見に絶えず努力する」ことをさす）に於てあくまで徹底的である場合と不徹底

であつても差支へない場合とがある。すなはち、その努力に軽重が生ずるのである。たとへば、隠岐本新古今集の原形態に対する考察のやうなのは、その軽き場合である。わたくしにとつては、隠岐本新古今集の原形態が明らかになれば、それに上越す悦びはないのであるが、しかし、原形態が不明であつても、隠岐で残された歌と捨てさせられた歌とが具体的に分れば、それでわたくしの当面の研究には差し支へがないのであるから、どの歌が捨てられ、どの歌が残されたかといふ調査にわたくしの全精力が傾注せられ、隠岐での御選抄にどういふ記号を用ゐられたかなどといふことについての関心はあと廻しとならざるを得ないのである。（中略）かういふ風に、具体的な個々の問題になると、わたくしの場合は、文献的考証のみを学問的対象としてゐる人と、その努力のしかたに些か相違を生ずることがあるだらうと思ふ。これは立場の相違上、止むを得ないことである」。紙数の都合で抄出は以上にとどめるが、以上の限りでも一定の立場、手法が見事に素描されてゐるのを見るのではあるまいか。

文中、隠岐本新古今集を例に引かれてゐるのは早く昭和十六年の『国語国文』七・八月に連載された「新古今集隠岐御選抄本について」の御仕事が念頭にあつたと思はれる。その大綱を記せば、七月の掲載分ははじめに関係の諸伝本の紹介、続いてこれら諸本間における、（一）選抄記号の体様の異同、（二）除棄歌の異同の精細な調査報告を内容とする。そして、（一）についてはその原形態は不明とされ、（二）についてはほぼ確実な除棄歌三七三首が提示される。八月の掲載分は右の（二）の結果を承けて、これら除棄歌の研究――その除棄基準や除棄理由を行届いた理解と鑑賞とを通して推定されたもので、究極院における「御好尚並びに御選歌眼の変化」が主な除棄理由として導き出される。おそらく論文の読者は、前に語られた「基礎的調査」から「研究」へと繋がるあの手法の鎖をみづから手繰り寄せる思ひをするのではあるまいか。

『新古今和歌集の研究』はもとよりこの論文も収めてゐるが、その際興味深いのは、前記七月掲載分を『正篇』に、八月分は標題も「後鳥羽上皇と隠岐御選抄本」と改めて『続篇』に分割編入されてゐることである。がそれは十分に計画された両篇の構成に準ずる措置なので、注目されるのはその構成の方である。即ち『正篇』の「はしがき」によれば、この書は「研究上の基礎的調査報告」（従つて『新古今和歌集の研究』と題すること、は、適切でないと思ふ」ともことわられてゐる）であり、「わたくしの所謂研究はその書（『刊行予定の『続』）に収めるつもりである」と記されるのである。これほど「研究」と「基礎的調査」とを峻別した措置もないわけで、その立場、手法の鮮明な反照といはなければならない。

先生の執筆活動を前引の歌文集『能古』と『山房雑記』（昭和五二年四月刊）とに付載されてゐる御自編「著作略目録」によつてうかがへば、研究はまだ学窓に在られた頃の「柿園詠草の研究」「大伴旅人の歌」「宗祇法師伝」（定稿は「宗祇法師とその生涯」（『国語国文の研究』昭和二年五・十一月、同三年四月）の研究）にはじまり、卒業論文とされた「藤原定家とその文学」（『続篇』所収。定稿は「藤原定家」（『国語国文の研究』大正十五年十月）で）でさへ宗祇研究の途上でてえまを得られたことが「新古今集と私」に語られてゐる。昭和四年九州大学において歌誌『能古』を創刊されてから毎号健筆を揮はれたのは殆どすべて明治短歌関係で、昭和七年同学文学部の研究誌『文学研究』が発刊されるに及び、「宗祇の晩年」に次いで同じ年やうやく「新古今和歌集の撰集態度と撰集事業（昭和八年七月）が現はれ、また「みだれ髪後景論」（『国語国文』昭和九年一・二月）に次いで同じ年

「所謂石津本新古今和歌集に就いて」（『文学研究』五月）が発表されるといふ次第。新古今集への傾斜が急速に進むのはそれ以後のことになる。しかしその後とて「わが国近世の運命悲劇」（『文学研究』昭和十八年十二月、『山房雑記』所収）や、『芭蕉と奥の細道ところどころ』（昭和五二年七月刊）の仕事も続けられてゐる。それらの分野にはあるいは新古今研究ほど十分にはその手法の展開されてゐないものもあるかもしれないが、文学そのことに寄せられた情熱、文学研究に対する自在で懐の深い態度は顧みて羨望にたへぬものがある。

―大阪大学名誉教授―